

長歌撰格

上

~4
655
1



門 655
卷 1



凡乃長歌撰格之法
及乃記心法一可道於人可哉
餘之於心也
之海記事書
也尔者

明治廿六年
十月廿日
購

橘守部著述

長歌撰格

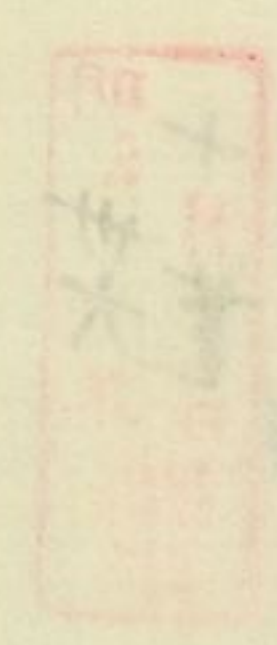
全二冊

椎本文庫藏梓

外女を名にしむるに其の記
婦人好むとありて

海にかくる

心二位季知



以て長短一なるを、子事能神乃命、
所業と記し居りし、
はやく世より去るなり、
抄す所代のは本記す、
何れより世を渡り、
物より時代の移るに随ふ、
王の教の調も、
に

多理をよむ正は本に新波のなま祭さむ
学北山口の世にわらふ人
結つるいこいれは学の色をなまむ
ふまはあゆみ歌も古くはにきく
言まはあゆみもあゆみ
是も先づ大人ならぬ
とまはあゆみもあゆみ
はまはあゆみもあゆみ

はいあしこの世風を物に
あつち物に あゆみあゆみ
とまはあゆみもあゆみ
く思ひあゆみもあゆみ
教探知の言はあゆみ
後あゆみもあゆみ
心とあゆみもあゆみ
そは上つ代の言はあゆみ

先一都... 諸君... 世に... 風の...
に...
の...

西信松浦
〜
〜

Faint handwritten text in the left margin of the right page.

〜
〜
〜
〜
〜
〜
〜
〜
〜
〜
〜
〜
〜
〜
〜
〜
〜
〜
〜
〜
〜
〜

Handwritten text in a cursive script, written vertically from right to left on the left page.

Handwritten text in a cursive script, written vertically from right to left on the right page.

春の風はたけなほすもよほしき花の香もよほしき
 心もよほしき身もよほしき世もよほしき
 人もよほしき物もよほしき事もよほしき
 時もよほしき空もよほしき地もよほしき
 水もよほしき火もよほしき木もよほしき
 石もよほしき土もよほしき金もよほしき
 銀もよほしき銅もよほしき鉄もよほしき
 鉛もよほしき錫もよほしき鋳もよほしき
 鋼もよほしき鉄もよほしき炭もよほしき
 薪もよほしき油もよほしき酒もよほしき
 茶もよほしき湯もよほしき飯もよほしき
 菜もよほしき肉もよほしき魚もよほしき
 鳥もよほしき獣もよほしき虫もよほしき
 草もよほしき木もよほしき花もよほしき
 果もよほしき実もよほしき種もよほしき
 子もよほしき孫もよほしき孫もよほしき
 孫もよほしき孫もよほしき孫もよほしき
 孫もよほしき孫もよほしき孫もよほしき

明治六年の月

鈴木守歌

長歌撰格上

橘守部撰述

いきとーいけるまの、中に、人も可なり貴たまのもなく、其たふと
 よ人み身ふ又心何かり貴たれしれし。然か貴よこ、ちふハあ
 斜と、そのろ、ろとや、色もななく、香もななく、形もれく影しんもあら
 されハ、目にも見えは手もろくれき、あすもれきて、まればあま
 まかきあへはるを、ち、ままく、耳にふく、おとめも、まん有ける。
 其音すれはち言み葉あゆまれハ世ふ言の葉は可なりたふよとよも
 のも、又あへあ、さりける、かき其こ、ろのい、まねるをうき、其お
 やもい、かま、其こ、ろの船こめるを、まハ、それおとも、なこめ、はま、
 り、其い、可なりを、人れうつき、時た、人もま、忽ちつ、う言、其あこめ
 は音、残、人にか、は、時た、人も又や、かてれとみゆく、こ、斜心の、おま
 び、互ふ相觸て、然る、あ、又人常に愁ふるを、うき、ま、ま、ま、音に觸

ゆきは、やかくて多うこそ、歡ふ守りも、患は音に觸るは、やかく憂
への催されゆく、是又、やかくハ、雙調調乃春に、黄鐘調乃夏に
宮、平調調乃秋に、至、盤涉調の冬に、なりて、あめつち、け、氣に應
し、人の情を、感通に、め、や、お、あ、こと、わ、り、な、ま、大、か、の、世、に、き
た、言の上、く、れ、か、く、の、如、し、ま、て、歌、を、其、こと、け、葉、に、あ、や、を、そ
と、ま、く、あ、ゆ、お、け、し、ん、愁、あ、る、こ、う、ふ、い、か、を、ま、の、い、か、か、さ
ら、ま、ち、か、ら、ま、い、れ、ま、て、天、地、を、ら、う、こ、か、り、ふ、思、え、ぬ、お、神
を、も、あ、ハ、お、と、お、り、は、勢、あ、を、い、へ、る、も、此、ゆ、を、お、る、そ、か、い、ま、は
あ、い、言、と、歌、の、上、紙、例、の、ま、ま、へ、て、い、ほ、世、の、ま、言、ハ、調、と
ま、の、い、は、る、琴、ま、ち、く、ん、彈、ふ、鳴、き、お、こ、と、く、歌、に、お、や、あ、て、ら、う、
ま、と、ち、を、調、子、を、正、し、絃、を、せ、め、あ、ま、て、彈、か、こ、を、た、ら、り、常、乃、詞、也、

心の喜ぶてきあれと、何やあ、ぬ、ハ、こ、ろ、に、そ、ま、に、只、か、た、あ、ら
き、も、琴、の、音、お、そ、あれ、ま、ま、く、へ、ま、の、へ、わ、き、再、に、か、ま、は、を、可、
計、ハ、ら、う、ハ、平、言、と、は、同、し、か、う、に、詞、に、あ、や、を、そ、へ、て、ま、ま、く、い、け、
こ、ま、く、ら、う、ん、事、以、ち、い、や、す、よ、ま、の、な、り、ま、ま、な、れ、ハ、上、つ、代、に
に、今、す、は、宣、命、の、文、也、其、つ、け、ま、は、た、く、言、の、ま、め、を、め、て、子、を、神
亦、請、禱、祝、詞、の、文、ハ、い、く、と、詞、を、か、さ、ら、れ、た、る、是、神、の、聽、愛、は、せ、賜
ふ、へ、に、為、な、れ、ハ、ぬ、也、神、代、紀、一、書、に、曰、神、閉、居、天、石、窟、云、云、諸、神、遣
中、臣、連、遠、祖、與、合、產、靈、兒、天、兒、屋、命、而、使、祈、焉、於、是、天、兒、屋、命、云、云、廣
厚、稱、禱、祈、啓、矣、于、時、日、神、聞、之、曰、頃、昔、人、雖、多、請、未、有、若、此、言、之、麗、美
者、也、乃、細、開、磐、戶、而、窺、之、也、又、云、た、は、ま、も、く、詞、に、美、麗、ふ、は、神、也、か
と、ら、そ、り、て、ま、い、し、け、れ、歌、を、こ、も、な、ま、の、あ、ハ、を、言、に、あ、ま、て、ら
あ、い、い、つ、ら、め、れ、な、れ、ハ、又、文、辭、と、ま、今、一、う、異、れ、ら、あ、や、ま、く、て

かろはなは高くいふにちしんを附そんていふいふといふ
先長歌の句格ハ直に雅樂のいふにちしんを附そんていふ古事記
上巻神代歌よ

〇八十のいふいふいふいふいふいふいふいふいふいふ

いふいふいふいふいふいふいふいふいふいふ

いふいふいふいふいふいふいふいふいふいふ

いふいふいふいふいふいふいふいふいふいふ

いふいふいふいふいふいふいふいふいふいふ

いふいふいふいふいふいふいふいふいふいふ

いふいふいふいふいふいふいふいふいふいふ

いふいふいふいふいふいふいふいふいふいふ

いふいふいふいふいふいふいふいふいふいふ

此句とてちしんを附そんていふいふいふいふいふいふいふいふ
古行古行相連ありていふいふいふいふいふいふいふいふ
いふいふいふいふいふいふいふいふいふいふ

いふいふいふいふいふいふいふいふいふいふ
いふいふいふいふいふいふいふいふいふいふ
いふいふいふいふいふいふいふいふいふいふ
いふいふいふいふいふいふいふいふいふいふ
いふいふいふいふいふいふいふいふいふいふ

梅の一首

いふいふいふいふいふいふいふいふいふいふ
いふいふいふいふいふいふいふいふいふいふ
いふいふいふいふいふいふいふいふいふいふ

いふいふいふいふいふいふいふいふいふいふ
相合きんは句とていふいふいふいふいふいふ
いふいふいふいふいふいふいふいふいふいふ

いふいふいふいふいふいふいふいふいふいふ
いふいふいふいふいふいふいふいふいふいふ
いふいふいふいふいふいふいふいふいふいふ

目

あやう ちきよ

ハナハシの 卯のふくさ しのかきいし ちきよは

此外ふる右のつらふ三首をうらひ書紀に二首出するも皆此趣
なり。下に引るしあれ くらさきとく其神たらしむるは
云うそあらず。古くより雅樂寮に八千牙舞など云曲ありて
其曲いさむい傳へきりし。彼久米舞など曲も准へてきりし。
凡そ古事記書紀に載せたる。古に代の哥とも云。皆雅樂寮にらる
と傳へたるを。彼書撰へりし時献らるる録せりし事。既に先
注とるに云る如くといふなり。右等の歌に次ぐに某曲まゝ上歌志
都歌志良直歌片下返歌など云々を添ふるも此故あり。記るも
その時長歌のみ。うらむを奉りて。片歌短歌旋頭歌等も皆
あいに添ふる。調へやもを省きて出せ。是本短歌八口誦のなり

物ふして殊に國史の上りたる。うらむ為ふ載せしむるは行ハ也。
あれハ。右記紀に載せたる。上つ代の歌やると相合せて。長歌ハ。
うらむへとくさるるものあつてをいさる。一。彼樂譜の節付と。
漫にりし知せさかしのめれと。樂律の事ハ。樂家の重んずる秘本にて。
要録體源鈔。五重序。當道宴集等に出る。事も引て云ふ。憚るハ。
あるおと。長たるとを。そのみ引出けとも。此心して此等其書を見
る人ぞ。おのつかり知へく。又次々更りてゆきは。今もさ
やゆりあり。いさるそのとて。それらるるは。たつ うらむへ
とくさるるも。うらむハ。萬葉卷一。舒明天皇内野に御獵立せし
時。中皇女命の。献らるる御歌ふ。やするも。吾大君に云。朝
かめに。今たけけら。夕かきふ。今もけら。云。やあ。さハ朝
とく出立きをりし。奉らるる御歌ふ。あさりつと云か
用ふる。夕獵やそん。うらむ。うらむ。うらむ。うらむ。うらむ。うらむ。
さき。うらむ。うらむ。うらむ。うらむ。うらむ。うらむ。うらむ。うらむ。うらむ。

二句ハ、樂家にいはゆる節博士といふものなりて其句添はてを
 三句ハ、間拍子にあそけり。又あはまきのおやにありと云
 を再返志強へるも皆ふく博士ありかくいふ。此みうくハ、間
 人連老はまき。献しめたるをいふ。うくひ強へるもあうくと
 なる。あうくハ、あま口つうらうらうらうらう。献呈賜ひあり
 上つ代志うて奉らうきるふく例き。彼仁徳天皇に大御歌を
 舎人鳥山といふをうて。筒城宮にまは。大后の御許に。あまけり、
 たくちうて。皆口つからうらうらうらう。あまけり。あまけり。
 まへにうらうらう。あまけり。あまけり。あまけり。あまけり。
 て。うらうらう。あまけり。あまけり。あまけり。あまけり。
 との歌あり。あまけり。あまけり。あまけり。あまけり。
 乞吾駒イテフカ早去欲ニギハヤク亦打山ニギハヤク将待妹乎ニギハヤク去而速見牟ニギハヤクと云を。催馬樂に載て其

うらうらう

いてあつ

あまけり

あまけり

あまけり

あまけり

うらうらう三十一字むらうを拍子とりけ。五十三言ふらうらうらう。又

續紀。天平十四年正月十六日條下に

新年始尔アタラシキトシノハジメニ何久志社カクシノヤ仕奉良米シラノコメ萬代麻豆マンダイマメ尔ニとあるを。同書にうらうら

うらうら

うらうら

うらうら

是又うへる所五十三言なり。古今集廿卷に

るかぬふく言傍の伴の事なむ。猶さりの言はるや」といふ

同書にのせて

るかぬふく 言さゆちり おろよせし 言さゆちり 言はるは

おろよせし

おろよせし

おろよせし 御さしめ

おろよせし

おろよせし

おろよせし

と評す八十五言にらむにちまひらめてその大方を知へた也

むかひの素戔鳴尊大御歌を三十一のけりめをて此
の数字いふもたりのいふをいめれと。今おとよふ彼御歌
は後、三十一の歌とす。その趣いや異なりて。めとはし。
立出雲も妻隠ふ八重垣作よと。宣へるほどのはりあるを。かの御
時よかめうへていと

八雲立

出雲八重垣はきりり

八重垣つゝるその

八重垣はと三段ふちうへて。うへに陽をさす。そはりの催

馬樂ふり。門をさすはかくし。ぬるそのと。ちけらら」といふ

なうきうとて

わが門を さすんあうきんぬるけりて。ちけららや

~~~~~

~~~~~

さけしきうしきぬむらめしき

~~~~~

さういひきこむ大詠ふきこむ

~~~~~

おほかちねそひてのちね

あを松ふさや

あを松ふさや

~~~~~

~~~~~

とちうくはきくせと合て考ふへ

尋常の短歌とは別なうと然るかへ

へてきゆく三十一文字い

てういひはひちるちるん

歌もいふしくちちかりける

らせて今の短歌をい

りの御歌をうきむい

ういひふりあを是を以て

けりぬそあくて短歌ハ

ふちよへきかのたやの

さおかひさやけさや

みみあるな長歌ふ

ふるくささうらいく

かたややうに重納する中にもやちりて。そのいはきうはさうきう
 ゆ。又やめつし。一二句をさくはふる。新加に。ちひみち
 ち。夕かりに。やちひみち。ちひみち。短歌もて。ちひみち
 ちひみち。けり。常多かり。是さうきう。ちひみち。ちひみち
 きる長歌の。優きちる。所より。其あやも。ちひみち。ちひみち。終歌に
 けりハ。猶皆。言の如く。然るに。ちひみち。今京のは
 ちひみち。ちひみち。ちひみち。ちひみち。ちひみち。上つ代
 け。ちひみち。優き。長歌の雅藻。ちひみち。ちひみち。ちひみち。ちひみち
 けり。ちひみち。續後紀卷十九。嘉祥二年三月庚申。興福寺。大法師等。
 為奉賀天皇。寶算滿于四十。奉造聖像四十。體云。副之。長歌奉獻其
 長歌詞曰。長歌一篇を記して。其歌。下に出せし。其次。夫倭
 歌之體。比興為先。感動人情。最在茲矣。李世陵。達斯道。巴墜。今至僧中

頗存古語。可謂禮失則求之於野。故採而載之。之見也。此御代や。遍昭
 業平。公君たちをけり。世に歌仙と稱へし。人。並ませり。頃ほ
 ち。に。彼法師の。る。ちひみち。ちひみち。歌を。ちひみち。ちひみち
 了。李世陵。達斯道。巴墜。ちひみち。記されし。ハ。偏ふ。長歌の絶き。代
 歎。ちひみち。され。ちひみち。古今集。ちひみち。ちひみち。ちひみち。撰集。ふのせ
 ちひみち。長歌と。又彼僧徒。乃ち。ちひみち。ちひみち。ちひみち。終に。編法
 也。句格。ちひみち。ちひみち。近來。吾古學。ちひみち。ちひみち。賀茂翁。ちひみち
 ちひみち。萬葉集。乃。長歌。ちひみち。ちひみち。ちひみち。其ふ。ちひみち。ね
 ちひみち。ちひみち。ちひみち。ちひみち。ちひみち。ちひみち。ちひみち。ちひみち。後の
 今に。ちひみち。古今集。ちひみち。ちひみち。や。萬葉集。継へき。長歌の。ちひみち。ちひみち
 ちひみち。ちひみち。ちひみち。萬葉集。ちひみち。起り。ちひみち。ちひみち。ちひみち
 ちひみち。ちひみち。ちひみち。ちひみち。ちひみち。被う。ちひみち。前。雅樂と

老と一く其格のありし。いふはたをさしむるありし。すう。たの
か。いふ。ふ。さ。す。さ。の。い。け。れ。い。又。や。う。て。あ。い。ぬ。さ。と。は。さ。り
に。い。ち。さ。り。は。く。も。其。あ。と。よ。り。て。か。い。の。人。を。か。か。め。さ。す。さ。さ。り
ふ。あ。い。い。め。さ。ま。古。言。を。入。て。その。ま。り。の。め。い。ら。ん。さ。い。は
る。か。も。さ。う。さ。あ。い。の。い。ふ。か。き。よ。さ。り。て。其。後。の。さ。り。て
て。頗。さ。い。は。あ。い。お。め。を。か。か。め。さ。さ。り。故。今。上。丁。代。の。歌。と
か。い。白。格。を。物。の。品。は。い。ら。ん。書。は。い。ら。ん。其。い。れ。さ。あ。さ。は。や
ま。さ。り。然。か。さ。と。は。い。れ。さ。ま。さ。い。の。い。け。さ。る。い。ら。ん。さ。い。の。あ
さ。あ。い。て。名。目。あ。い。て。は。い。と。め。か。か。い。ま。か。い。假。令。其。名。と。い。を。さ
ら。て。記。志。し。て。い。ら。ん。さ。り。い。の。人。を。さ。り。の。め。い。ら。ん。さ。り。し
に。さ。い。ら。ん。さ。り。い。ら。ん。い。の。い。ら。ん。さ。り。定。め。り。さ。り。を。さ。り。後。に
ま。さ。い。は。い。白。格。あ。い。ら。ん。か。如。く。い。ら。ん。さ。り。其。名。目。と。い。の。言。を。て

易
なり

またいされども。さしはく漢文の方にいひあがり。文字とよま
ておふせつかにさ。い。ら。ん。さ。り。い。の。い。ら。ん。さ。り。い。の。い。ら。ん。さ。り
に。さ。り。さ。い。し。い。や。さ。て。その。名。目。に。疊。句。と。い。は。ん。同。語。を。重。ね。て。さ
ら。い。ら。ん。さ。り。い。ら。ん。さ。り。詞。を。か。い。て。い。ら。ん。さ。り。い。ら
ん。常。多。く。さ。り。殊。に。雅。さ。て。い。ら。ん。世。に。是。を。對。句。と。い。は。ん。さ。り
人。の。い。ら。ん。さ。り。い。ら。ん。さ。り。猶。皆。疊。句。の。例。と。い。は。ん。對。句。は。な。あ
ら。ん。漢。國。の。詩。文。辭。と。い。は。ん。物。二。つ。を。取。合。せ。て。必。さ。り。及。對
さ。り。い。ら。ん。類。は。同。く。い。ら。ん。其。例。を。か。い。て。い。ら。ん。さ。り。い。ら
よ。さ。り。さ。り。い

か	い	い	い
い	い	い	い
い	い	い	い
い	い	い	い

志は入は ちみけおき

志はすけの ちみけおき 又

志は入は ちみけおき

志は入は ちみけおき

ちみけの類、左右より同くして、實を一句つゝみて事なりき
る。次の句とも、只重ねてさへ、さへさへさへさへ也。かゝるは乃
詩句に。

歸路煙中遠 傍潭窺竹暗 湖聲蓮葉雨 沍露收新稼

廻舟月上行 出嶼見沙明 野色稻花風 迎寒背日廬

雨圍殘竹粉 山從平地有 釀酒栽黃菊

風砌落松欵 水到遠天無 抽絃對白雲

林間暖酒燒紅葉 攬鏡自憐添白髮 一連花影三更月

石上題詩掃綠苔 閑樽暫許借朱顏 十里松陰百道泉

春倩群花為韻客 雲間東嶺千重出

秋延衆卉作嘉賓 檻外南湖百頃寬

かく志も、左右各別物を取合せしる類ひを、必ず一聯合せしむる
義理を盡さば故く、け歌のおわつゝりおるは、其卑即ハ更に
もいそい、趣意も又別あり、すてかくけさよ作可設て、對句と
るハ、かの土ふても、衰て後のちおさるること、彼國人にあるは
たしわいさくしりき、況や此方乃歌に墨句、そのはとちり、な
ふおりのちさくことちり、か、次に聯墨やいふは、墨句なりて、章
段なり、るを云、ち、墨句のちおを云、ち、あ、は、次に隔墨と
いふハ、句を隔て、か、ね、る、を、いふ、次に變墨や云は、或ハ半句
を、一句と知重ね、或は一句や一句半とをかきねて、上を合せ、下
を活り、つゝる類なり、次に今對句といふは、前の詩句の

條ふいよこも。他物をやううはせり一對にいゝるを云ふ。されど上つ代の歌みそ。こゝろに儲出て。對字やうもとするやうにめをばをばくあゝをれき。ちま丹く事をかへ。物を轉して云へるかあるのみあり。その實を皆疊句の例ありされど。世にさる類を。對句とおぼえていそ習ひまつれて。其中みいそか似へはを。姑く對句やば名付。その似よりといふ。

ゆく水の ぬるぬる

又

うまかき せわはてしなく

又

ふく風の めはておかく

又

てはさるる しまゆり

あを治に のそむにねぬ

又

まけのき 山一足かかし

あらしに ちみくはさぬ

又

秋の夜を 江一はちか

てをらねたる字法を云ぬ。次に隔對といふ。章句を隔て對字を云。上の疊句と。隔疊といふ例のこゝ。次に變對や云は。五言

の句を。七言の句を對して。活きて。下へけい。なほ字いふ。此格文詞を常におよれと。うゝはち。一句對のみええて。二句以上のるはええは。うゝふりねき。詞の偏發にあるを記す。ゆゑに。次に招應といふ。彼事招き出むやして。先。此事をいふ。此事を。即て彼事と相應し。ゆゑ。所乃ある。或云。次は喚響と云ふ。響の音に應ず。後かてやく。そこち。お句に。其事とめね。ち。おあひする。を云。次は首尾といふ。初めいひは。うゝ。えとりの。い。つ。に。な。ら。な。は。や。ふ。や。ち。め。は。を。云。大か。の。言。語。の。け。だ。ふ。も。て。け。を。け。の。も。す。ひ。け。こ。や。よ。始。終。の。勢。ひ。あ。る。ま。る。字。近。世。う。は。を。ち。を。け。て。い。く。人。も。あ。る。さ。れ。ば。今。け。世。に。長。歌。文。章。を。い。て。又。う。を。け。る。こ。や。お。ほ。す。り。故。此。の。招。應。喚。響。首。尾。の。三。種。ハ。互。に。相。似。て。何。て。か。め。差。し。ぬ。り。ぬ。り。如。く。な。れ。と。此。心。り。ち。ひ。ち。り。漫。筆。ふ。け。く

言やちきいゆく言れよ句と、入るゝ里、又前後の應せに
 ちて、いんけいふ浮漂へる言やまの、いてまの物なれハ、そは印は
 やうにそとけんそと、三くそとを分るはれゆり、次に調段と云
 を、上つ代の歌は、一篇の上を、二段ふる、三段にまうへはるち。
 其句とり段をはくちやて、又或は物の非一を、いひつくや
 て、そのうちくは、句段をちて、くひをいひ、次に譬喩、次に序辭、
 ておらはいけり、ゆるなれハ、釋みおれを、以上は、句の疊句
 ちり以下、十三種を以て、先、其大いさをさくせんを、然れども、以
 ち、句の中は、假令、終を設け、記ちて、其句格をさくせ、其歌やもの前
 後、何れれめり、さやけへし、その終例を

疊句ニ三

聯疊ニ三

隔疊ニ三

變疊ニ四

對句ニ四

隔對ニ四

變對ニ四

招應ニ四

喚響ニ四

首尾ニ三

調段ニ三

譬喩ニ三

序辭ニ一

凡一篇の上は、其等お終ふあつは、やとろを、すては、文といふ、
 あやとは、古今密勘の註曰、世ふあつ、りのて、錦綾の織物をほり、
 龜の甲、貝の殻、すて、紋ちた物をそとれ、網の目、籠の目、布の目、
 といふより、色ふり、めい、海をまやめと云や、あや、あや、
 ちらんと云、歌の御註あるから、かくは申を、終へるめり、猶い、
 物の色は、あや、あや、あや、あや、あや、あや、あや、あや、
 海、拍子よく、あや、あや、あや、あや、あや、あや、あや、あや、
 舞の手ふり、あや、あや、あや、あや、あや、あや、あや、あや、

ふしほろあつ勢で、引入を云なり。事して歌なり。あを針を述
多。天地神靈を感せむ。ほろの物なり。そのつやあ
つはえあろ。今かふくと。論ふこれ。あを。右に左云。皆
此あやの上の。さたふはれさ。故上つ代に歌文章ふ。右
れ十三種に句法の外に。言語のいひ。後世にてあうる
けさるあや。おなり。今其あを。假し四種ふ。分ちて。連實。光
彩。數量。方邊。や名づく。連實や。天某。國某。神某。日某。宮某。家某。山某。
海某。濱某。河某。水某。石某。よといふ。くを何。や。春山。秋山。朝川。
夕川。初瀬風。伊香保風。木綿山雪。島山松。か。つ。可わ世。志あ。の。真
弓。か。忠。の。黒駒。松浦舟。熊野船。有馬管笠。難波女。あ。つ。は。男。孀屋。妹。可
手枕。君。か。弓。束。豆。結。の。小鈴。木綿花。竹玉。羽。漫。ふ。と。や。う。に。一。句。の。中
に。實。物。の。異。類。を。連。用。せ。る。な。い。に。次。に。光。彩。や。白。某。赤。某。青。某。黒

某。玉某。大某。太某。豊某。伊都某。瑞某。高某。廣某。齋某。若某。奇某。幸某。美
某。な。と。い。ふ。類。を。け。り。せ。の。遠。人。國。の。長。人。遠。御。世。遠。御。食。長。御。代。
長秋。新室。新来。まゆ。和栲。荒栲。燒鑊。燒太刀。利心。雄健。ひ。速男。は。や。り
を。鳴。鑊。鳴。け。く。堅。逆。常。宮。ま。か。玉。身。そ。鏡。真。名。子。最。手。ほ。つ。て。の。白。秀
罇。秀。國。な。と。の。た。く。い。何。ふ。よ。う。に。稱。辞。飾。言。を。そ。へ。て。美。麗。く。も。嚴
か。ふ。も。雄。々。志。く。い。い。た。く。志。云。次。に。數。量。や。一。り。と。管。二。上
山。三。重。の。帶。四。方。の。御。門。五。伴。の。を。六。の。御。懸。七。世。申。さ。ね。八。峯。の。椿。
九。み。子。等。十。拳。劍。ち。と。や。う。ふ。一。より。十。百。を。五。千。萬。さ。て。の。詞。の。も
ふ。あ。く。後。く。と。へ。七。條。七。車。七。相。管。七。拳。脛。八。重。棚。雲。八。尋。茅。八。塩
折。酒。八。目。荒。籠。八。尺。の。嘆。百。箱。百。枝。槻。五。百。霧。五。百。津。真。賢。木。五。百。重
浪。千。重。浪。千。引。石。千。の。り。の。鞞。千。名。の。五。百。名。ち。と。や。う。ふ。後。世。の。人
あ。ら。は。只。虚。句。を。て。い。く。へ。い。く。う。あ。き。く。か。き。く。ち。と。い。い。へ。所

をき、それへの数の語りて、つよく雅をいへるたういを云次に
方邊やハ恒ハ山邊海邊をいへは邊のたういのみにあつす
やへは雷の上藤原かろへ河をよ上つ瀬中つ瀬下つ瀬上つ枝中
つ枝下つ枝小松可下梅杉のそといはかへりて荒山中野中
中高山は末短山の末やると島根岩根水根おかおく床底は
岩根そたへの極そておろろ片山片洲内つとらにやつ宮かけ
とらそやも月あつて日けよとのくいをそへやまてすて
上下左右縦横自他ふめは詞と云云そよくいひへの詞は
かちふ再疎くちりて只後のめいをいへる馴たらむ人のく
とせにきかはいむさす別ハ雅ひりるとはめくすか
やとくいひへに訓てよくおひいぐ之顧みよく味をいゆは
かゝ言のいむさすにいゝく雅俗をいふふれはとらへに

めはそ故此四種ののうハ短歌撰格の方にあつて其向をぬき出で
然る所以ののうを法をいへるわりつかへる合せ委
るハ又へたなりされと長歌の方ふハ其志をくふて上つ代
に詞遣ふの於ちそかに美麗かまへらるる見れくへるわ
こゝにも其片をををわりて簾の例にみへるわりへるわ
連實ニハ 光彩ニハ 數量ニハ
方邊ニハ
かくめこやと皆其言に首ハ冠らせよまハ此等の志ををて
古よ代ハ雅ハ語のいをけ用ひざるをえへする猶此外も
實向虚向中虚向等けさるるあれと例の皆短歌撰格の方にゆつ
ててあつてみず清よつかくて先づに上は代ハ歌ハ大なる編
法を一段置きて其大なるをさやへし

神代記曰八千矛神云々此神御哥上に出し又其神之嫡后須勢
理毘賣命云々取大御酒坏立依指舉而歌曰

八千矛の 神の御哥 御出たり 又其神の嫡后須勢

理毘賣命云々

取大御酒坏立依指舉而歌曰

八千矛の 神の御哥 御出たり 又其神の嫡后須勢

理毘賣命云々

取大御酒坏立依指舉而歌曰

八千矛の 神の御哥 御出たり 又其神の嫡后須勢

理毘賣命云々

取大御酒坏立依指舉而歌曰

八千矛の 神の御哥 御出たり 又其神の嫡后須勢

八千矛

神の御哥

御出たり

又其神の嫡后須勢

理毘賣命云々

取大御酒坏立依指舉而歌曰

八千矛の 神の御哥 御出たり 又其神の嫡后須勢

理毘賣命云々

取大御酒坏立依指舉而歌曰

八千矛の 神の御哥 御出たり 又其神の嫡后須勢

理毘賣命云々

取大御酒坏立依指舉而歌曰

おんさうりておんさうりて
おんさうりておんさうりて

おんさうりて

おんさうりて

おんさうりて

おんさうりて

おんさうりて

おんさうりて

おんさうりて

おんさうりて

おんさうりて

おんさうりて

おんさうりて

おんさうりて

おんさうりて

おんさうりて

おんさうりて

おんさうりて

おんさうりて

此歌、始ふ朝日の思ふに云はたる句を、未の言思ひを云
ふ言尾去て、其中向はれ、松と云ふ、云々の句は、おんさうりて
松の枝と云ふ、又秀枝の枝めつらる、云々、中つ枝下つ枝に云
おんさうりて、みよまは、苗の面にてかたくり、又ゆへると、その意情の
可やと云ふ、さうりて、さうりて、さうりて、さうりて、さうりて、さうりて
一篇の意を、解まは得て、又さうりて、さうりて、さうりて、さうりて、さうりて、さうりて
歌おまへ、むさしと云ふ、おんさうりて、さうりて、さうりて、さうりて、さうりて、さうりて
予不稜威言別を、見へた也

萬葉卷二十八 柿本朝臣人麻呂從石見國別妻上来時歌

其のうへに...
 今本の上...
 二句二聯...
 用ひを
 知へし

同卷五丁石田王卒之時丹生王作歌

ふゆたきね

〓〓〓
 〓〓〓

〓〓〓
 〓〓〓

〓〓〓
 〓〓〓

〓〓〓
 〓〓〓

〓〓〓
 〓〓〓

〓〓〓
 〓〓〓
 〓〓〓

〓〓〓
 〓〓〓
 〓〓〓
 〓〓〓
 〓〓〓
 〓〓〓

〓〓〓
 〓〓〓
 〓〓〓
 〓〓〓

くら。その外。拓。意。委。格。の。さ。ま。笑。や。い。色。て。見。へ。き。あり。け。く。出。く
 ち。て。み。そ。よ。く。身。一。を。け。次。お。出。ゆ。ま。て。ほ。り。へ。て。身。一。顔。と。り。よ
 二。句。を。後。ち。り。す。へ。て。集。中。に。お。く。さ。ま。あ。る。同。句。を。見。ま。か。へ。て。
 一。方。様。お。や。あ。る。く。と。を。う。く。あ。ま。す。く。技。合。あ。て。よ。め。よ。る。一。に
 け。ま。し。あ。

同卷九丁 山部宿禰赤人登神岳作歌

山部宿禰赤人登神岳作歌

山部宿禰赤人登神岳作歌

山部宿禰赤人登神岳作歌

山部宿禰赤人登神岳作歌

山部宿禰赤人登神岳作歌

山部宿禰赤人登神岳作歌

山部宿禰赤人登神岳作歌

山部宿禰赤人登神岳作歌

山部宿禰赤人登神岳作歌

山部宿禰赤人登神岳作歌

山部宿禰赤人登神岳作歌

同卷六丁 讚久彌新京歌

讚久彌新京歌

讚久彌新京歌

讚久彌新京歌

讚久彌新京歌

讚久彌新京歌

讚久彌新京歌

あまのりつれ 三〇
 いそがしき 三〇
 三〇

何んてつみ 三〇
 三〇
 三〇
 三〇
 三〇
 三〇
 三〇
 三〇
 三〇
 三〇

大勢の

此歌も一めり双つ餘大勢を、まけ大勢云々と首尾し、中間
 乃かせひのまに、まけはら云々と、後の大勢は、首尾云々、
 其間おろし、隔置せり、さしてのまに、まけ、あ、なりけり、
 三〇、まを、さて、し、何れ、まけ、まけ、まけ、まけ、まけ、
 篇、句調上の歌と、し、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、
 ま、か、つ、ま、か、つ、ま、か、つ、ま、か、つ、ま、か、つ、
 三〇、先、上、つ、代、す、り、三、良、の、朝、す、て、の、ま、か、つ、ま、
 る、て、三、卷、の、中、間、ま、つ、ま、か、つ、三、卷、の、中、間、ま、つ、

きいし、われと、次に、ま、か、つ、三、卷、の、中、間、ま、つ、
 る、歌、を、ま、か、つ、ま、か、つ、三、卷、の、中、間、ま、つ、

上古の歌を、打よむを、ま、か、つ、三、卷、の、中、間、ま、つ、
 る、を、今、置、きて、ま、か、つ、三、卷、の、中、間、ま、つ、
 る、を、今、置、きて、ま、か、つ、三、卷、の、中、間、ま、つ、
 る、を、今、置、きて、ま、か、つ、三、卷、の、中、間、ま、つ、
 る、を、今、置、きて、ま、か、つ、三、卷、の、中、間、ま、つ、
 る、を、今、置、きて、ま、か、つ、三、卷、の、中、間、ま、つ、
 る、を、今、置、きて、ま、か、つ、三、卷、の、中、間、ま、つ、
 る、を、今、置、きて、ま、か、つ、三、卷、の、中、間、ま、つ、
 る、を、今、置、きて、ま、か、つ、三、卷、の、中、間、ま、つ、
 る、を、今、置、きて、ま、か、つ、三、卷、の、中、間、ま、つ、

ちよ中に驚くけり文ありて上つ代に長歌のまゝくややは
ら同いさまあるも何ゆき但しは比の比すりか句調級倒を以て
むそのほりまざる後の今様をや同き七言すりうひ起し
すおほくハ七五とつたまゝの置對ふとのまひゆき古に長
歌のまゝへやハすりあつてあるハ催馬樂の反詞あるハ
漢國の毛詩の句並ひなとよく相似し是神まかしの雅操と
民間に唱謡との差れる一は唱歌の句並ひ歌ふもの一の例
格をうたれハ茲に記さまほりまきと詞のいやまよふ歌はく
てはよまつ彼毛詩中に偶四五篇上たねまゝへに似るありや
を准て今くふ引へし

詩関雎

関々雎鳩在河之洲窈窕淑女君子好逑

窈窕淑女寤寐求之

求之不得

寤寐思服悠哉

悠哉輾轉反側

參差荇菜左右采之

窈窕淑女琴瑟友之

窈窕淑女鐘鼓樂之

同葛覃

葛之覃兮施于中谷維葉萋萋黃鳥于飛集于灌木其鳴喈々
葛之覃兮施于中谷維葉莫々

是刈

是獲為絺

為給服之無數言告師氏
言告言歸

薄汙我私

薄澣我衣

害澣

害否歸寧父母

同漢廣

南有喬木不可休思

漢有游女不可求思

漢之廣矣不可泳思

江之永矣不可方思

漢之廣矣不可泳思

江之永矣不可方思

翹々錯薪言刈其楚之子于歸言秣其馬
錯薪言刈其萋之子于歸言秣其駒

漢之廣矣不可泳思

江之永矣不可方思

同行露

厭浥行露豈不夙夜謂行多露誰謂雀無角何以穿我屋

誰謂雀無角何以穿我屋

雖速我獄室家不足

誰謂雀無牙何以穿我墉

誰謂女無家何以速我訟

雖速我訟亦不女從

同何彼穠

何彼穠矣唐棣之華曷不肅離

何彼穠矣華如桃李平王之孫

齊侯之子其釣維何

維絲

伊緡齊侯之子

平王之孫

同匏有苦葉

匏有苦葉

濟有深涉

深則厲

淺則揭有彌濟盈

有鳴雉鳴濟盈不濡軌

雉鳴求其牡雝雝鳴雁旭日始且士如婦妻迫水未泮

招々舟子人涉印否

人涉印否

印須我友

同谷風

習々谷風以陰

以雨黽勉同心不宜有怒采芣

采菲無以下體

毋逝我梁

毋發我笱

我躬不閱遑恤我後就其深矣方之

舟之

就其淺矣泳之

游之何有。何止黽勉求之

久方の 春さくら しくやて かにとちす ちのちよ 春さくら
いふもたぬ 陰きるよ 春さくら

同きういんそへてなてまじひのちのうら

主世、

くらきよ かのかたて ちよせは くら録の源の いんさき
のさくしー ちんちんー ちんちん くらきよは くらきよ
くらきよ くらきよ くらきよ くらきよ くらきよ くらきよ
くらきよ くらきよ くらきよ くらきよ くらきよ くらきよ
くらきよ くらきよ くらきよ くらきよ くらきよ くらきよ
くらきよ くらきよ くらきよ くらきよ くらきよ くらきよ
くらきよ くらきよ くらきよ くらきよ くらきよ くらきよ
くらきよ くらきよ くらきよ くらきよ くらきよ くらきよ
くらきよ くらきよ くらきよ くらきよ くらきよ くらきよ

くらきよ くらきよ くらきよ くらきよ くらきよ くらきよ
くらきよ くらきよ くらきよ くらきよ くらきよ くらきよ
くらきよ くらきよ くらきよ くらきよ くらきよ くらきよ
くらきよ くらきよ くらきよ くらきよ くらきよ くらきよ
くらきよ くらきよ くらきよ くらきよ くらきよ くらきよ
くらきよ くらきよ くらきよ くらきよ くらきよ くらきよ
くらきよ くらきよ くらきよ くらきよ くらきよ くらきよ
くらきよ くらきよ くらきよ くらきよ くらきよ くらきよ
くらきよ くらきよ くらきよ くらきよ くらきよ くらきよ
くらきよ くらきよ くらきよ くらきよ くらきよ くらきよ

此外三首ありとも。同きうをかきよまきよはふまじつてまきよ一篇を
て単句みのまきよ。て彼五十七をまきよへまきよはまきよのまきよ
まきよはまきよのまきよ。物よれはまきよはまきよのまきよ
まきよはまきよのまきよ。まきよはまきよのまきよ
まきよはまきよのまきよ。まきよはまきよのまきよ
まきよはまきよのまきよ。まきよはまきよのまきよ
まきよはまきよのまきよ。まきよはまきよのまきよ
まきよはまきよのまきよ。まきよはまきよのまきよ
まきよはまきよのまきよ。まきよはまきよのまきよ

よのちぞ かしこく せしむる しのぶの しのぶの
おのちぞ かしこく せしむる しのぶの しのぶの
おのちぞ かしこく せしむる しのぶの しのぶの
おのちぞ かしこく せしむる しのぶの しのぶの
おのちぞ かしこく せしむる しのぶの しのぶの
おのちぞ かしこく せしむる しのぶの しのぶの
おのちぞ かしこく せしむる しのぶの しのぶの
おのちぞ かしこく せしむる しのぶの しのぶの
おのちぞ かしこく せしむる しのぶの しのぶの
おのちぞ かしこく せしむる しのぶの しのぶの

此外二首ありとそゆゑおあしきうくちの省ちつ。外に予載集

以下乃撰集又人々の家集。自撰の集とて載しはし。いとおぼし
きや。きへて皆此ありたるつ。けふ。彼十三種の簽とてに。
あつ。へまうそ。絶て見えざりたる。是風調。句格を失へし
ゆ志に。歌の衰へつは。いち。る。徴ちり可。すく。これ。つ
たふ。あ。の。思。ら。う。て。上。つ。代。け。ら。の。あ。や。の。文。を。注。く。て。は。て
ふ。ふ。や。ひ。の。い。う。に。も。あ。ら。ふ。も。さ。く。の。ほ。く。と。満。ち。ま
せ。る。ゆ。く。へ。し。貴。ふ。へ。し。か。け。お。上。つ。代。の。歌。と。を。お。あ。ま。て。
よく。格。調。を。し。と。さ。む。と。す。と。上。つ。代。を。し。と。せ。て。は。あ。ま。ち
に。聯。疊。隔。疊。の。歌。の。お。あ。ま。の。あ。ら。は。又。疊。對。の。お。あ。ま。の。を。
く。ろ。と。し。の。ふ。ふ。あ。ら。は。め。て。の。お。あ。ま。の。さ。く。の。お。あ。ま。の。
あ。ま。の。物。お。あ。ま。の。あ。ま。の。

萬葉卷一十六 柿本朝臣人麻呂過近江荒都時作歌

いとすはらむにけりけり
いとすはらむにけりけり

いとすはらむにけりけり
いとすはらむにけりけり

いとすはらむにけりけり
いとすはらむにけりけり

いとすはらむにけりけり
いとすはらむにけりけり

同卷十八 持統天皇幸于吉野宮之時柿本朝臣入麻呂作歌
いとすはらむにけりけり

いとすはらむにけりけり
いとすはらむにけりけり

いとすはらむにけりけり
いとすはらむにけりけり

いとすはらむにけりけり
いとすはらむにけりけり

いとすはらむにけりけり
いとすはらむにけりけり

いとすはらむにけりけり
いとすはらむにけりけり

いとすはらむにけりけり
いとすはらむにけりけり

いとすはらむにけりけり
いとすはらむにけりけり

香拾 乃

△つゝめあつゝみはまき 美き 花あきりめら

秋なき 紅葉かきやち ゆゑの 神あはれに

はくまゝ 全 濃子 くらり

△濃子 さはしり やま川も よろはなる 神あはれに

ちれらのきく忠ハ、或きやまもたり。近江まての地理を以ては
け、或ハ天皇の行幸ハ御稜威をてへある、其官所の形勢を
りて、一首の文をせるふれハ、もめにあくるる歌ともやハ、其の
あやのくせきま、こもるれま、かま彼四種ハ潤色も、おりのら
うはきくく、かゝるは、枕詞の、左右相ま、の、學對の例ま
り、り、されハ此枕詞地名をも、を、重めて、一の體をま、あり
武烈紀曰戮銷臣、於乃樂山、是時影媛逐行戮、蒙云々作歌

△つゝめあつゝみはまき

△濃子 さはしり

△秋なき 紅葉かきやち

△はくまゝ 全 濃子 くらり

△濃子 さはしり

萬葉卷十三 古歌

△つゝめあつゝみはまき

△濃子 さはしり

△秋なき 紅葉かきやち

△はくまゝ 全 濃子 くらり

△濃子 さはしり

見ゆらん
見ゆらん
見ゆらん
見ゆらん
見ゆらん
見ゆらん
見ゆらん
見ゆらん
見ゆらん
見ゆらん

古事記同段 天皇坐長谷之百枝榭下為豐樂之時云 即歌曰

志たの 天女入き うつらり ちんちん

あまはら をゆふあ

うすきあて くらかき

うすきあて くらかき

推古紀曰二十年春正月天皇云置酒宴群卿是日大臣上壽歌曰

あまのり ちんちん くらかき くらかき くらかき くらかき くらかき くらかき くらかき くらかき

同卷三 万葉卷二 丁 天智天皇大殯宮之時太后御作歌

万葉卷二 丁 天智天皇大殯宮之時太后御作歌

あまのり ちんちん くらかき くらかき くらかき くらかき くらかき くらかき くらかき くらかき

あまのり ちんちん くらかき くらかき くらかき くらかき くらかき くらかき くらかき くらかき

同卷一 丁 舒明天皇登香具山望國之御製歌

あまのり ちんちん くらかき くらかき くらかき くらかき くらかき くらかき くらかき くらかき

こにきく 煙ぢいぢ
しほあこ ちんちんちんちん
あつらうを ちんちんちんちん

あつらうを

同^{十一} 大海人皇子命下^三近江國^二時御作歌

あつらうを
あつらうを
あつらうを

あつらうを

あつらうを

あつらうを

あつらうを

同卷三^{十二} 山部宿祿赤人望不盡山作歌

あつらうを

あつらうを

あつらうを

あつらうを

あつらうを

あつらうを

あつらうを

あつらうを

あつらうを

あつらうを

あつらうを

あつらうを

あつらうを

あつらうを

あつらうを

あつらうを

あつらうを

あつらうを

あつらうを

あつらうを

あつらうを

あつらうを

あつらうを

あつらうを

あつらうを

あつらうを

あつらうを

あつらうを

あつらうを

あつらうを

あつらうを

あつらうを

あつらうを

あつらうを

あつらうを

あつらうを

あつらうを

あつらうを

あつらうを

あつらうを

あつらうを

あつらうを

あつらうを

あつらうを

あつらうを

あつらうを

あつらうを

あつらうを

あつらうを

あつらうを

あつらうを

あつらうを

あつらうを

あつらうを

あつらうを

あつらうを

あつらうを

あつらうを

あつらうを

あつらうを

あつらうを

経るにてもえりてぬ風韻あるかお申す其大抵十句にかりよ
りて二十句ありけるそのうへに於ては詠歌詠歌歌ありて
きはるるもほしのこゝろをきくもさるる白字ありて長
歌ありてゆきまをさへてうはるる一はなれりて
いとちよふもつたふをゆかふてさるるをりて
長かろもすつてさるるあはれゆくは海をさるる
さへともいさるる手にゆかふて又ちのほろけ小長歌ふとて
く言の敷ふもかこらるるさるるほよをさるるて
ほあちさるるさるるの風體よりさるるさるるさるる
をて國ゆ

應神紀廿年春三月天皇幸難波云々望况媛之船以歌曰

あはれさるる

あはれさるる

あはれさるる

あはれさるる

仁徳記曰天皇戀其黒日賣云々坐淡道鳴遥望歌曰

あはれさるる

あはれさるる

あはれさるる

あはれさるる

萬葉卷十三丁古歌

あはれさるる

あはれさるる

あはれさるる

同卷二十

わー... ちんちん... くにの... ちんちん...

ちんちん... ちんちん...

ちんちん... ちんちん...

ちんちん... ちんちん...

ちんちん... ちんちん...

ちんちん... ちんちん...

ちんちん... ちんちん...

同卷二十

ちんちん... ちんちん... ちんちん...

ちんちん... ちんちん...

ちんちん... ちんちん...

ちんちん... ちんちん...

同卷二十

わー... ちんちん... ちんちん...

ちんちん... ちんちん...

ちんちん... ちんちん...

ちんちん... ちんちん...

ちんちん... ちんちん...

ちんちん... ちんちん...

同卷六十五 聖武天皇賜酒節度使卿等御製歌

わー... ちんちん... ちんちん...

ちんちん... ちんちん...

ちんちん... ちんちん...

わー... ちんちん... ちんちん...

ちんちん... ちんちん...

ちんちん... ちんちん...

ちんちん... ちんちん...

凡かつらに五七ならぬ句しものある歌よつきて本居氏の説云
五言の句は四言六言七言の句に六言八言にもよみたるあるそ
る歌らふふよにハみち五七の格ハ五七ハ世に以等の説を信
者きてに故夜翁と云い入るることと云れハ世に以等の説を信
ふて古風を好む輩さらは言の数のいふやうにやうとて撰置に
五七の格ハそむてよむる者取本つかあよとてなやかあ
はる然るようちと右の歌中あもあもあはのあも
えゆさけつあるもえゆ又けのうまやとてかよとまぢむか
こはうまやとてかよあまらとてのうらむにけりてあて七
言の句ハ三言四言かあていつふも右の説取まかしてあ
人ハ古事記傳ふことめかありあてこを以て此語を三言句讀

なり是もけくの句ハ七言のとてあはに三言を然るに
是等を引延てみれ七言の格にうふまのとせハはあ五七
みちへを守るにむらハぬりのせあゆあまれと云
神世より五七のうへをきよらみまつは彼そらみつやうと
のらにちものふらむハはるありぬんを今此條ハあはの
たらハハのとあに當昔樂曲中あも尋常にけりる節博
士もえゆめれハ其等の曲に節めて右等のとせハとてあ
まけも萬葉一人麻呂大人の歌にゆふまはのかきもたみ多につ
かへまつる也いふ類をあめ又集中七言三句引つけて結め
らるもあも皆よく樂曲の節ああしあも神樂催馬樂譜も彼
七言三句等あまへのうへあもをえれハ右等の調へも合
し曲のありあもあまられう古事記朝倉宮段に天語歌をいふ

樂曲の名にありハ餘言の義と云けりハ上つ代中の一は曲
のありをもちともちり物にあらはれハみまに為へしにあり
に。ま物にあらはれ。五七のりはまはるゝものありあらはるゝ
まはるゝに例ふより。まはるゝまはるゝにまはるゝまはるゝ
るゝ。ちのまはるゝ中。五七のりも正しくはるゝまはるゝに
はるゝまはるゝ。まはるゝまはるゝ。まはるゝまはるゝ。まはるゝ
まはるゝ。まはるゝまはるゝ。まはるゝまはるゝ。まはるゝまはるゝ
まはるゝ。まはるゝまはるゝ。まはるゝまはるゝ。まはるゝまはるゝ

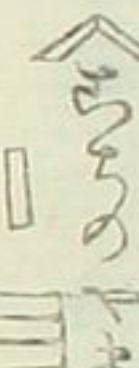
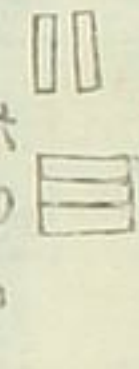


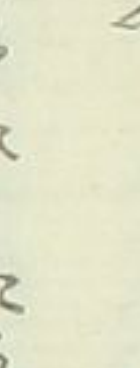
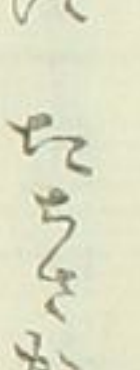

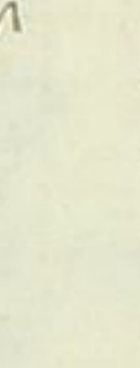
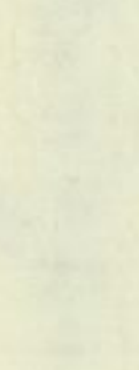
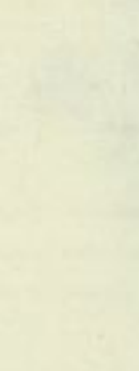

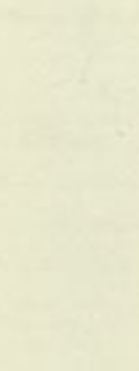
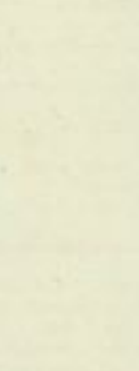
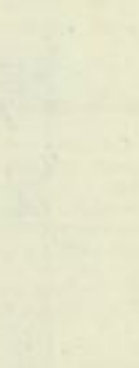
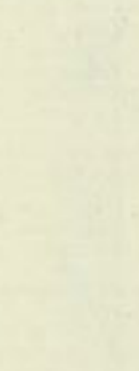

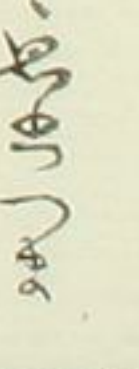
允恭記曰木梨輕太子姪其伊呂妹輕太郎女云云流於伊余湯也
云々輕太郎女之追到之時待懷而歌曰
こりらけけつま川の金つ浪に
こりらけけつま川の金つ浪に

こりらけけつま川の金つ浪に
こりらけけつま川の金つ浪に
こりらけけつま川の金つ浪に
こりらけけつま川の金つ浪に
こりらけけつま川の金つ浪に
こりらけけつま川の金つ浪に
こりらけけつま川の金つ浪に
こりらけけつま川の金つ浪に
こりらけけつま川の金つ浪に
こりらけけつま川の金つ浪に



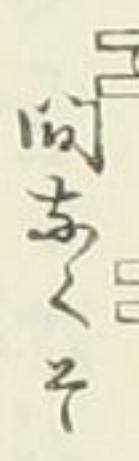
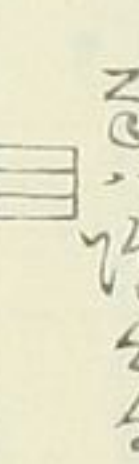
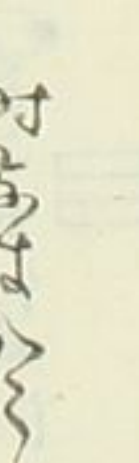
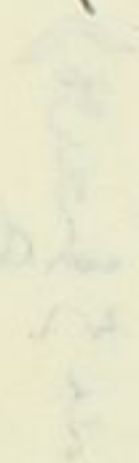
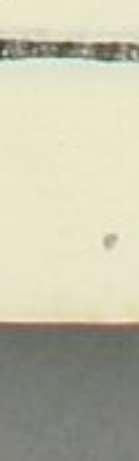

同記同太子御歌

あゝとちのまはるゝまはるゝ
あゝとちのまはるゝまはるゝ
あゝとちのまはるゝまはるゝ
あゝとちのまはるゝまはるゝ
あゝとちのまはるゝまはるゝ
あゝとちのまはるゝまはるゝ
あゝとちのまはるゝまはるゝ
あゝとちのまはるゝまはるゝ
あゝとちのまはるゝまはるゝ
あゝとちのまはるゝまはるゝ


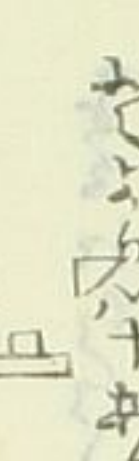

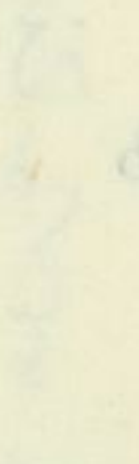
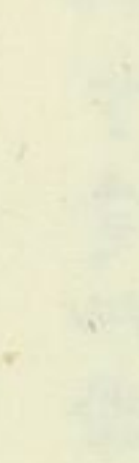
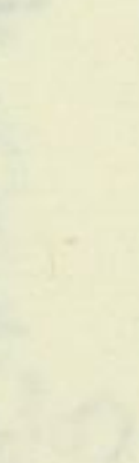


雄畧記曰初大后坐日下之時自日下之直越道幸行河内云云行立
其山之坂上歌曰

とほろりめ 
ちかみ 
ちかみ 
ちかみ 
ちかみ 
ちかみ 
ちかみ 
ちかみ 
ちかみ 
ちかみ 
ちかみ 
ちかみ 
ちかみ 
ちかみ 
ちかみ 
ちかみ 
ちかみ 

萬葉卷一十五 天武天皇幸吉野宮時御製歌

あふ 
あふ 
あふ 
あふ 
あふ 
あふ 
あふ 
あふ 
あふ
あふ
あふ
あふ
あふ
あふ
あふ
あふ
あふ
あふ
あふ
あふ
あふ
あふ
あふ
あふ
あふ
あふ
あふ
あふ
あふ
あふ
あふ
あふ
あふ
あふ
あふ
あふ
あふ
あふ
あふ
あふ
あふ
あふ
あふ
あふ
あふ
あふ
あふ
あふ
あふ
あふ
あふ
あふ
あふ
あふ
あふ
あふ
あふ
あふ
あふ
あふ
あふ
あふ
あふ
あふ
あふ
あふ
あふ
あふ
あふ
あふ
あふ
あふ
あふ
あふ
あふ
あふ
あふ
あふ
あふ
あふ
あふ
あふ
あふ
あふ
あふ
あふ
あふ
あふ
あふ

同卷十三丁六 古歌

あふ 
あふ 
あふ 
あふ 
あふ 
あふ 
あふ 
あふ 
あふ
あふ
あふ
あふ
あふ
あふ
あふ
あふ
あふ
あふ
あふ
あふ
あふ
あふ
あふ
あふ
あふ
あふ
あふ
あふ
あふ
あふ
あふ
あふ
あふ
あふ
あふ
あふ
あふ
あふ
あふ
あふ
あふ
あふ
あふ
あふ
あふ
あふ
あふ
あふ
あふ
あふ
あふ
あふ
あふ
あふ
あふ
あふ
あふ
あふ
あふ
あふ
あふ
あふ
あふ
あふ
あふ
あふ
あふ
あふ
あふ
あふ
あふ
あふ
あふ
あふ
あふ
あふ
あふ
あふ
あふ
あふ
あふ
あふ
あふ
あふ
あふ
あふ
あふ
あふ
あふ

同五丁古歌

あしりくけはつて愛國ま くらんせは 吾大皇す興

あしりくけはつて愛國ま

くらんせは

吾大皇す興

あしりくけはつて愛國ま くらんせは 吾大皇す興

同ハ古歌

あしりくけはつて愛國ま くらんせは 吾大皇す興

あしりくけはつて愛國ま

くらんせは

吾大皇す興

あしりくけはつて愛國ま くらんせは 吾大皇す興

あしりくけはつて愛國ま

くらんせは

吾大皇す興

あしりくけはつて愛國ま

くらんせは

吾大皇す興

斯之献大饗者慈賜其御軍以時歌曰

あしりくけはつて愛國ま くらんせは 吾大皇す興

あしりくけはつて愛國ま

〇~~~~~

〇~~~~~

〇

〇

〇

〇

〇~~~~~

〇~~~~~

景行紀曰昔日本武尊向東之歲停尾津濱而進食是時解一劍置於

松下遂忘而去今至於此劍猶存故歌曰

をほりふ たむる 〇~~~~~

〇~~~~~

〇~~~~~

〇~~~~~

神功紀攝政元年三月云々爰武内宿禰選精兵從山背出之至荒道

云々忍熊王出營欲戰時有熊之凝者云々因以高唱之歌曰

〇~~~~~

〇~~~~~

〇~~~~~

〇~~~~~

〇~~~~~

〇~~~~~

〇~~~~~

應神記曰於是大山守命者云々有殺其弟皇子之情云々爾兄王兵

各沒河流弟王歌

〇~~~~~

〇~~~~~

あしはら

あしはらの Δ あしはら Θ あしはら Θ あしはら \square

あしはら \square

田

あしはら \square

田

あしはらの Δ あしはら Θ あしはら Θ あしはら \square

そへて上つ代のうゝい。全々一段なるは、可くちうくちう。おおくも
二段あり。三段あるも、うゝり。その中にかくちうも、同句の
歌ひかへせるも、そのへたてあり。自一格のこゝくあり。こ
ちには十首許あはせてはいて、こゝへ、二段目あり。何れに
一段のつゝいのみ。餘情を述て、首尾を、うゝめ、かゝる。上
に立かゝりて、歌ひかへせる。かおほり、萬葉集に長歌の末に
反歌とて、別な短歌をそへ、はらある。これと同じちうは

へあり。つゝく古への歌曲を考ふるに、呂よりうゝい出たるも、次は
律に入。あしはらに呂は立かゝるて、ちうめ。又律より歌を、ち
るも、次に呂は入。あしはら元の律は、ちうめ。結めつゝ、さああり
るれ。其歌の言かゝるに、ちうめ。音よりいありて、別な短歌を、か
てかへそる。あり。ちうめ。即古事記高津宮段に、志都歌之返歌と
見え。又神樂催馬樂等ふる。反物の歌とある。是也。然るに世々の學
者、彼万葉集に反歌を、反ち段、字の草書も、短の意や。或は長
歌の一篇の意を約め。又或は、あしはら、ちうめを述てかゝる。ち
なといちう。後世には、ゆる。贈答ふる。へん歌の、に説き、ち
ふる。此呂律の、ちうめ、節めかゝる。ちうめを、ちうめ、ちうめ也。
此こと、ちうめ、ちうめ、ちうめ、ちうめ、ちうめ、ちうめ、ちうめ、
親、反物の、乃條、ちうめ、詳く、ちうめ、ちうめ、ちうめ、ちうめ、
ちうめ、ちうめ、ちうめ、ちうめ、ちうめ、ちうめ、ちうめ、ちうめ、

萬葉卷一
三十一 藤原宮御井歌

Handwritten musical notation in Kana style, consisting of multiple lines of notes and symbols. The notation includes various rhythmic markers and melodic lines, typical of traditional Japanese music notation.

Handwritten musical notation in Kana style, consisting of multiple lines of notes and symbols. The notation includes various rhythmic markers and melodic lines, typical of traditional Japanese music notation.

あはれみよき御心

あはれみよき御心

あはれみよき御心

あはれみよき御心

同卷二 五丁 天武天皇崩之時太后御作歌

あはれみよき御心

あはれみよき御心

あはれみよき御心

あはれみよき御心

あはれみよき御心

あはれみよき御心

同三丁 明日香皇女木庭殯宮之時柿本朝臣人麻呂献忍坂部皇子歌

あはれみよき御心

あはれみよき御心

あはれみよき御心

あはれみよき御心

あはれみよき御心

あはれみよき御心

あはれみよき御心

あはれみよき御心

あはれみよき御心

かろす せゆるる。ほくハ 見えたり

萬葉卷二二十丁 天智天皇崩之時太后御作歌

うつせし 非なるべし 誰れなる

さうらみ 命あつさるる

よあはは 命あつさるる

なあはは 命あつさるる

命あつさるる

同卷一十二丁 天智天皇詔内大臣藤原朝臣競憐春山萬花之艶秋山

千葉彩時額田王以歌判之歌

かゆらり 命あつさるる

はらけり 命あつさるる

山をきり 命あつさるる

命あつさるる

秋やまは 命あつさるる

命あつさるる

同卷三十三丁 長皇子遊獵獵路池之時柿本朝臣人麻呂作歌

やほ 命あつさるる

命あつさるる

命あつさるる

命あつさるる

命あつさるる

命あつさるる

命あつさるる

同卷六十七丁 神龜三年秋九月幸於檜磨國印南野時山部宿禰赤人

作歌

やまを〜 命のたぢみ かさぢりら 雲のきりぎりす 山部宿禰 赤人作歌

きりぎりす 人そはらぬ 山部宿禰 赤人作歌

同十四 神龜二年夏五月幸于芳野離宮時山部宿禰赤人作歌

やまを〜 命のたぢみ かさぢりら 雲のきりぎりす 山部宿禰 赤人作歌

同卷十三 二十丁 古歌

〜 宿禰の川乃 又〜

同卷十五 十一丁 古歌

〜 宿禰の川乃 又〜

そのうち、ころころとあやうく。集中七々の歌りてきたるに
はくそわたりなると。かきつめ長をつきお中に變轉するこ
ころもあつ。只二句はくの疊對をもなると。ほつとほつとく
あきおまるとち。此の歌を一體あつて。詞遣をきひとつ
雄々志くたさると。ふあれと。句格をきつてきや。漢めきた
と。そつと。かかつと。は。はやと寧樂朝をきつてき。歌のおころ
へきと。故とつと。へし。故萬葉集中にきつてき。作者をきつてき。ささ
代の歌と。次みは柿本山部大人をおきて。あつてやると。へたると
えは。かの聖武天皇は。節刀使の酒をたまふ大御歌と。あつて
代とつて。形はな。て。ふるせ。た。あ。へ。る。さ。れ。は。其。世。ふ。あ。は。は。古。雅
れる。や。と。は。の。き。あ。ゆ。る。あり。遣唐使餞別のつと。け。た。と。あ。は。は。此
たをを。これ。あ。は。の。家持御と。家集を傳へて。歌のおは

かきは。こそあれ。も。へ。て。風調。は。い。く。く。荒。ひ。て。く。と。け。か。あ。は。の
皇。た。き。歌。の。あ。や。き。き。記。紀。ふ。き。く。へ。よ。その。そ。ら。た。其。す。ら。れ
多。い。つ。り。き。二。聖。と。い。へ。や。も。ほ。か。み。お。あ。は。も。さ。の。國
に。く。ら。ふ。へ。た。物。も。れ。く。あ。と。皇。天。地。の。間。に。高。く。秀。る。も。れ。也。
あ。つ。く。へ。し。貴。ふ。へ。し。さ。ま。や。數。千。歳。の。今。あ。つ。て。それ。う。は
古。歌。を。學。ぶ。に。は。大。き。に。こ。ろ。え。あり。その。う。ま。小。巻。け。を。き。ふ
云。へ。し。

